

GRADUATION

宮本星美

I 個人面談の場

(七人の生徒が思い思いの表情で教師を前にして座っている)

どうしていつも個人面談の部屋って薄暗いんだろう。担任の先生と一対一になれる唯一の場所なのだけども。いつも緊張と不安が付きまとう。最後までその緊張が抜けない者、途中からリラックスする者。黙っていたかと思ったら、突然大声をあげて自分を主張する者、様々だった。

ヒロミ (前に身を乗り出して) 先生、私、どうしても熱中時代みたいな小学校の先生になりたいんです。はい、頑張ります。陸上で鍛えてますから根性だけはありません。この足見てください。

美歩 (うつらうつらしている) えっ、あっ、どうもすみません。だからー私、卒業できればいいんですよね。ちよつと前までは、卒業なんてって思ってたんですけど、でもー、やっぱり皆が、夏子なんかもー、一生懸命やってるしー、そういうの見たら、なんか私だけ取り残されちゃったみたいで焦っちゃったんです。だから、卒業します。えっ? 専門学校ですか? 今じゃみんな行ってるしー、一種のファッションですよ。私は家で家事手伝いしますから。

さゆり (必死に抵抗している) 他大受験なんてまっぴらです。高校も受験、大学も受験じゃ身が持ちませんよ。四年生英文科、それで結構です。あのー先生、私、社長秘書希望しているんですけど、先生のお知り合いにどなたか大企業にお勤めの方いらっしゃいませんか? あら、いない。じゃ、まあよろしく。

愛 (沈黙を破って) 先生、私絶対他大受験します。浪人なんかしません。絶対今年中に入ります。時間が無いんです。こんな形だけの面談なんて、やめてください。

夏子 (驚いて) えっ? 家政科ってひどいですよ先生、私が裁縫苦手なの知ってるくせに。鬼! せっかく中学からこの学校にいるんだから……。自分の希望通りに行かないこともある(先生の言葉を繰り返して) って言ってる、とにかく、私は四年生の国文科です。私、今コピーライターになろうか、物書きになろうかなんて悩んで

いるんです。それを四年間で決めたいから、お願いします。

久美（先生の言葉を遮るように）先生、私、自分のことは自分で決めたいんです。自分のことは自分が良く分かってますから。なんだか嫌なんですよね。縛られるのって。細かい規則、くだらない友達、まっぴらです。私早くこの学校を卒業したいんです。

礼（しきりにうなずいて）先生、わたしも四年生の児童科が自分に合ってると思うんです。幼稚園の先生になりたいんです。他大受験ですか？無理ですよ私なんか。先生、赤ちゃんっていつ頃喋れるようになるか知っていますか。歩けるようになるのと声帯が下がってきて、それで声はつきり出せるようになるんです。そういうことを勉強したいんです。子供について。えっ？私が答辞読むんですか？

七人、立ち上がり将来の夢に向かったポーズを決める

II 卒業式の朝

いつもと変わらない教室の風景がある。教壇があつて、ロッカーがあつて。冬の教室は一層ひんやりして冷たい。

卒業式の朝である。思いを込めた様子で花束を抱きながら一人の生徒が教室に入ってくる。久美である。卒業式の朝の写真を撮ろうとしてシャッターを切る夏子。ポーズを取るヒロミ、美歩、さゆり。その瞬間はこの数分後に待っている。花束は薄桃色の薔薇である。

一同 キヤハハハ・・・

夏子 ねえねえ、今度は皆で写真撮ろうよ。せっかく卒業式の朝なんだから、喜びと悲しみを混ぜ合わせたような顔してみて。私がせーの！って言ったたら、「卒業」って言ってね。

三人 オツケー！

夏子 せーの！

一同 (久美も巻き込み) そつぎようー！

夏子 残りはさ、式場で撮っちゃおうよ。

ヒロミ だめだめ。そんなことしてたらまた先生に怒られちゃうよ。

美歩 ねえ、先生と一緒に写真撮らない。意外とさ、先生泣いちゃうかもよ。

さゆり 泣かない。泣かない。

夏子 今日さ、先生どんな恰好してくるかな。いつもみたいなだっさい恰好してきたら私絶対許さないから。燕尾服でも決めてもらいたいね。

ヒロミ 白衣なんか着てきたりして。

美歩 実験のしみとかつけてたり。

一同 さもありなんと想像する。

久美 まあ、いいんじゃないの。そういうのも。

さゆり 信じらんない。久美って。

夏子 先生さ、最後にどんなこと言うのかな。絶対臭いこと言うに決まってるよね。

ヒロミ (教壇に立つて) 君たちの花嫁姿が見たいよー。オーイ、オーイ。

夏子 絶対それだよ。

美歩 なんか緊張してきちゃった。

一同 え？(いっせいに美歩に注目する)

夏子 そうだ！卒業したらさ、卒業旅行っていうの行かない？

一同 賛成！

夏子 どこがいい？

美歩 ハワイ！

夏子 ちょっと、とっぴだよ。

ヒロミ えー？もっと近い所がいい。近い所じゃないとヤダ、ヤダ、ヤダー。

(一同まじまじとヒロミを見る。)

夏子 なんだかんだいっていつつポツになってたからねー。

さゆり ねえー。ヒロミちゃん？

ヒロミ 今度は大丈夫。皆で一緒に行こうね。ねー。

一同 ねー。(あてつけがましく)やくそーく！

(一同卒業旅行の話で盛り上がる。一人取り残された夏子は、しきりに時計を確認している。)

夏子 ねえ、ねえ、ねえーってば。礼、遅いと思わない？もうそろそろ来てもいい頃だね。

ヒロミ 昨日電話したときまだ答辞書き直してるって言ってたよ。(一人落ち着いて)

さゆり 書き直すなんて大丈夫なの？

ヒロミ なんか、うまくいかないって悩んだ。

夏子 (焦って)でもさ、先生にはいいってほめられたんでしょ。

ヒロミ でも書いているうちに自分に飾りが出ちゃうんだって。

夏子 かっこつけちゃって。

さゆり あの子も完璧主義だからね。

美歩 でも、あの壇上で読ませてもらえるってだけで幸せよね。

(ヒロミ・夏子・さゆり・美歩の4人でポーズ)

(美歩を発端になんとなく礼の噂話に花が咲く。そこへマフラーをして鞆を持った礼が慌てて登場する。)

礼 おはよう。

さゆり あっ、礼。(みんなを止める。)

夏子 (さっきとは打って変わった様子で) どうしたの？ 礼、遅かったじゃない。

礼 うん。なんだかご飯がのどを通らなくて。

ヒロミ そりゃ、そうだね。

夏子 お父さんにお母さんにおばあちゃん。おまけにおじいちゃんまで来ちゃうんだって？

礼 そうなの。どうしよう。

ヒロミ なに言ってるのよ。自信持ってやりなさいよ。あっ！ そうだ。リハーサルやってみたら。

夏子 いいよ、それ。折角朝早くきたんだし。

一同 やろう、やろう、いええい！

(一同机を式の壇上のように並び変える。)

美歩 あたし校長！

夏子 あたし教頭！

夏子・美歩 いえーい！

夏子 準備オツケー？

一同 オツケー

夏子 おほん。生徒総代、鮎川礼。

礼 はい。（緊張した返事をし、おもむろに前へ進み出る。）

さゆり 礼、がんばって。

ヒロミ 礼、がんばれい。

（一同ヒロミをじろっと見る。）

（礼は練習どおり挨拶をして）

礼 答辞

本日はこのように盛大な卒業式をお挙げ下さいまして、私共一同感激で胸がいっぱいでございます。ただ今は、校長先生をはじめ、皆様の御慈愛にあふれたお祝辞を頂き、有り難うございました。「今日からは高校生」と胸を膨らませつつも自らを戒めたあの入学式の日。中学に比べて授業が数段と難しくなったことに始めは戸惑いを感じておりましたが、先生方の厳しくも御丁寧なご指導の御蔭で次第に親しんでいけたことが今も私共の胸を熱くします。高一の西湖へのオリエンテーション。そして思い出深いのは、高二の修学旅行でございます。生憎の雨で、思うようには見学できませんでしたが長崎の情緒は今も懐かしく私共の胸によりみがえって参ります。また、原爆資料館を訪れた時には数々の生々しい写真が「戦争とは何か」と鋭く私共に問いかけているような気が致しました。

この旅行のクライマックスは何と言いましてもフェリーからの夕日ではなかったでしょう。寄せては返す波の響き、頬をなでる風の爽やかさ、まるで、その空間、その刹那のみが俗世間のありとあらゆる雑事から独立した幻想の世界を作り上げていたようでした。少しでも真新しいものをと知恵を絞り、連日準備に精を出した文化祭。また若さの祭典ともいえる体育祭では、勇ましさの中にも女らしさを秘めた応援に励まされて快い汗を

流したことを忘れることはできません。

思い出は楽しいものばかりではございません。何度も行われた模擬試験や先生方との面談。理想と現実との間に立たされ、苦しみ悩みながらも、そのたびに成長していく自分が嬉しくもありました。

夏子 うわーん。

美歩 夏子、泣いてるの？

夏子 (すすりあげながら) だって、感動しちゃったもん。

礼 ほんと？

夏子 うん。

美歩 かつこいいんだけどさ。なんか自分の思い出じゃないみたいなのよね。他人の聞いているみたい。

夏子 (向きになって) そんな事無いわよ。なんかドラマチックでさ、私はジーンときちゃったな。

久美 そうかな。それじゃ私は泣けないな。

夏子 何言うのよ。

久美 だってその答辞去年とほとんど同じじゃない？違う？

夏子 そうよ。そこがいいんじゃない。だってさ、いいものは変わらないって言うじゃない。

ヒロミ そうかな。「私共は感謝の気持ちで胸がいっぱいでございます。」なんてちよつとわざとらしくない？

夏子 ヒロミまで何言うのよ。

ヒロミ 別に礼を責めてるわけじゃないのよ。ほら、うちの学校って割と型にはめちゃうところあるじゃない？だから、いいんだけどさ、何かこういまいちのらないのよね。

久美 思い出を並べただけっていうか。

ヒロミ そうそう。そんな感じ。味わいがないっていうか。

夏子 それは、リハーサルだからじゃない？本番聞けば絶対泣けちゃうって。

ヒロミ 夏子はね。

さゆり あたしも、答辞ってこんなもんだと思うけどな。

(美歩・ヒロミ、そんなことないと二人だけで話を始める)

夏子 (頭にきて) みんなさ、ちょっと冷たいんじゃない？礼はさ、これ、必死で書いたんだよ。何ヶ月もかかってさ。みんなはいいわよ。出来上がったものをただ批判してればいいんだから。でもね、今日の卒業式で実際に読む人の気持ちになってごらんささいよ。あーだ、こーだ言われて、気分良くなんて読めないわよ。

久美 いっそ書きかえたら。

夏子 三時間でどうやって書きかえろっていうのよ。

ヒロミ ちょっと気に食わないところだけ直せばさ、みんなやれば出来るんじゃない。

美歩 やろう、やろう、いええい！

夏子 そんなにうまくいくわけないでしょ。これはね、礼の汗と涙の結晶なのよ。

美歩 オーバーなんだから。

夏子 うるさいわね。みんなおかしいんじゃないの。たかが答辞にどうしてそんなにむきになるのよ。

ヒロミ どっちがむきになってるのよ。「たかが」ってどっちが礼に失礼なのよ。

夏子 だって！大切なのは今日私たちが卒業するってことでしょ。そこで読まれるのがオーソドックスであればあるほど、うーん来たって感じで感動するんだと思うけどな。奇抜なのってそのときは面白いかもしれないけど、絶対後に残らないと思う。

美歩 あたし、読み方にも問題あると思うんだけどな。もっと元気出して読んでみたら。

ヒロミ 答辞を元気だして読んでどうするのよ。それこそ「答辞！」なんて読んだら感動のひとつかけらもないじゃない。

久美 ありがちなフレーズが多すぎるのよね。

礼 書いているうちにね、どうしても段々と型にはまってきちゃって。

美歩 だいたいさあ、答辞なんて三年間お世話になった先生方へのお礼の手紙ですって感じだもんね。

礼 三年間でしょ。どうしてももっときれいにとかもっと丁寧にとか、つい力が入ってきちゃって、自分の気持ちが素直に出せなくなっちゃったの。

夏子 (慰めるように)でもさ、先生にはよくまとまっていて表現も適切でいいって言われたんでしょ。礼 うん。でも自分でもこれでいいのかなって思っちゃって今日学校来るのすごく嫌だったの。

夏子 何言ってるのよ。私は去年の答辞なんかよりずっと真に迫っていいと思う。私はこのままでいいと思うな。ううん。このままがいい。だいたいさあ、こんなところでブーブー言ってる人たちが案外コロッと泣い

ちゃったりするんだから。セレモニーなんだから、しっかりした形のほうが私はいいと思う。

ヒロミ 夏子はすぐ燃えちゃうんだから。セレモニーなんてわかってるわよ。でもさ、私はもっと卒業！って
いう実感が欲しいのよね。だって私たちにとって最初で最後の卒業式なんだから。

美歩 あのさ、一人一言ずつ言えば。生徒会長がマイクもって一人一人に聞いて回るの。「どうでしたか？この三
年間は。」

(ヒロミに向かって)

ヒロミ とても一言では言い尽くせません。(臨場感たっぷり)

さゆり それよりさ、投票制にしようよ。読んでもらう人を投票で決めるの。いいと思わない。そしたら、私も
読めるかもしれないじゃない？

久美 それじゃ同じよ。267人の気持ちを分かる人なんていると思う？

ヒロミ もう！なんかいい方法ない？

美歩 今から？

夏子 もうやめなさいよ。今から何ができるっていうのよ。大変だったんだから。礼は。

美歩 じゃあ、聞くけど夏子。私たちの修学旅行ってホントにあんなのだったけ？あれじゃまるで観光パンフレ
ットだよ。

夏子 (礼を気にして)ひどいよ。

美歩 (それを必死にごまかすように)ほらっ！怒られたじゃない？高二の修学旅行でさあ。忘れちゃった？

夏子 あっ！思い出した。みんなで悪乗りしちゃってさあ。怒られたじゃない。

さゆり 夜十一時ごろ皆で湖行ったやつでしょ。

夏子 こっちにスマホ、こっちに任天堂スイッチ、なんてさ。

一同 楽しかったなあ。

(そこはもう湖畔である。湖の並みの音が耳に心地よい。ヨットも遠くに見える。できるだけ情緒を醸し出すように。)

一同 浸りきる。

ヒロミ (ヒロミだけどういうわけか取り残されている) いいなあ。

さゆり いいなあーって、ヒロミも行ったじゃない。

ヒロミ 私、陸上の大会で行けなかったんだもん。行きたかったなあ。悔しいよ。全部用意もしてあったのに。雨で大会が延びて修学旅行、行けなかったんだもん。

夏子 (なんとかヒロミの機嫌を直そうと) 楽しかったよ。

ヒロミ 夏子、最低！

さゆり 大変だったんだって。あの時は。ちっともいいことなんてなかったんだから。私なんかさ、思わず大学の推薦の心配しちゃったもん。

美歩 結局はさ、この子が見つかったのがいけないんだよね。

一同 人のせいにはしないの。

転換

III 修学旅行の場

静かな音楽が流れる。
空には満天の星。

夜の湖畔である。7人がパジャマ姿で、中には懐中電灯を持って、波打ち際に集まってくる。

愛 吸い込まれそう。

(礼、愛を探して走ってくる。)

礼 何やってるの？

愛 何にも。

礼 愛、あつという間に先に行っちゃうんだもん。待っててって言ったのに。

愛 ごめんね。(持っていた本を落とす)

礼 (本を拾い)“ターゲット”そっか、不安だね。愛、他大受験だもんね。

愛 言わないでね。皆に。絶対言っちゃヤダからね。

礼 愛さ、そんなに外、出たい？

愛 女子高十年なんて絶対いや。息が詰まりそう。

礼 ふーん。

愛 礼は何も感じない？

礼 何を？

愛 普通の女子大生でいいの？

礼 普通の女子大生？

愛 うん。あの大学校舎から出てくるあの人たちを見てると、何だか自分もあんな風に女子大生っていう一つのイメージで束ねられちゃうのかな、なんて思うといやなの。

礼 ふーん。普通の女子大生か。

さゆり やだっ！押さないでよ。暗くて何も見えないんだから。

夏子 私なんでこんなにたくさんお菓子持ってきたんだろう。

さゆり それだけならいいよ。私なんかスマホも任天堂スイッチも持って来ちゃったんだもん。ねえ明日、荷物検査あるって本当なんでしょうね。

夏子 本当らしいよ。さっきみんなが言ってたの聞いちゃったんだ。

愛 ねえ、見て！星がきれい。あれがこぐま座でしょ。それから、あれはきりん座。きれいだなあ。

夏子 プツ、何言ってるのよ愛。どうも愛の性格ってよくわからないのよね。やめなさいよ。星を見る子はねえ、早死にするって言うんだから。

さゆり ほんと？

夏子 おばあちゃんから教わったんだ。それよりこのお菓子どこに隠したらいい？あっ、ここなんかどう？砂の中に埋めちゃったりして。

(と砂を掘り始める)

さゆり ばーか。もつと頭使いなさいよ。ほらっ、ここにいいものがあるでしょ。

一同 ラッキー、ボートだ。

(皆ボートの中にお菓子等を入れる)

夏子 ねえ、なんか今足音聞こえなかった？

(そこへ美歩がやってくる)

美歩 こらっ、何やっとなるんだー！

一同 ギャー。

さゆり あっ、あの、月がきれいでついその。

美歩 アハハハハ。

一同 (美歩以外) 美歩ー。

愛 やだあ、もう。

夏子 何やってんのよ。信じられない。

美歩 だって私のこと置いて行っちゃうんだもん。

夏子 何言ってるのよ。テレビ見てから行こうなんて言ったの誰よ。

美歩 だってあんなに早く行くとは思ってなかったんだもん。

さゆり いいからそんなことで喧嘩しないで早くそのお面とマント、あの中に入れちゃいなさいよ。
久美 じゃ、私先帰るから。

（久美帰る）

さゆり ちょっと待ってよ。いつつもあるんだから。

夏子 案外ああいうところあるよね。

礼 私たちもそろそろ行かない？

さゆり 大丈夫だって。それより愛は？

礼 波打ち際にいるよ。愛、愛！

愛 気持ちいい！

（波に足をつけている）

さゆり そんな水の中入ったら風邪ひいちゃうよ。

愛 だって気持ちいいんだもん。

夏子 あったしも入ろ。

（皆騒ぐ）

さゆり もう、大きな声出さないでよ。

（ヒロミが先生に扮し、久美を捕まえてやってくる）
ヒロミ お前ら何やってんだー！

一同 きゃー！

(あわてふためく)

ヒロミ お前達、一体何時だと思っとなるんだ。見ろ。ホテルの明かりは全部消えとるぞ。

夏子 全部じゃないよね。

ヒロミ あげあしをとるんじゃない！お前らはこの長崎に修学旅行に来てるんだぞ。規律正しい生活が出来なくてどうするんだ。どうしてこんなことしたんだ？

さゆり あのー、私たち、あんまり月がきれいだからー、つい誘われちゃってー。

一同 誘われちゃってー。

夏子 ホテルの前に湖なんかあったりして、ちょっと入ってみようかな・・・なんて。

一同 なんて。

ヒロミ 本当にそれだけか？

一同 はい。それだけです。

ヒロミ どけ！

一同 いやー！！

ヒロミ 何じゃこりゃー！！

(一同、一列に正座)

ヒロミ お前ら、もー許さん。ロマンチックな気分に入るんだったら先生もわかる。わかるぞ。だが、マイクとサンングラスとは何事だ。

さゆり 今日、ダンパだったんで。(一同一斉にポーズ)

ヒロミ しかも、しかもだなー美歩！

美歩 はい。

ヒロミ お前のクラスのヒロミ、ヒロミはなあ、この旅行に來たい來たいと泣いとったぞ。

夏子 ヒロミのことばかり。

ヒロミ ばかもん。友達が來たくても來れなかったこの旅行をお前らがこんなものにしていいと思っとるのか。

一同 すみません。

ヒロミ よし、先生方の部屋の前で朝まで正座だ！

一同 はい。

(生徒のハケと共にバスガイド登場)

溶暗。

舞台は転換。

客席からバスガイド登場。

ガイド はい、皆さま、左手をご覧くださいませ。左手に見えますのは、かの有名な鬼の洗濯岩でございます。右手に見えますのは、由緒ある青島神社でございます。本日はシルバールーの西肥バスをご利用頂き、誠に有り難うございます。では、次にこどもの国でお昼に致しましょう。(退場)

IV 卒業式の朝の場

一同着替えて登場。
第II場に戻る。

一同（大笑い）

美歩 さゆりうまい！でもさ、あたし達あの時は、ほんとバカだったよね。でも、みんな離れ離れになったらもう二度とあんなことないもんね。楽しかった。

さゆり 愛も元気だったしね。

一同（無言）

礼 （振り切るように決心して）あたしやっぱり書き直す。

夏子 礼！！

ヒロミ やったね。

礼 だってこのままじゃ、私達の修学旅行とあまりにもかけ離れてるもん。夕日は確かにきれいだったし、長崎の町はエキゾチックに私達をむかえてくれた。でも、そんなこと並べたって仕方ないんだよ。確かに観光パレットみたいだったと思う。

ヒロミ 私みたいにいけなかった子もいるしね。

美歩 怒られたのもいるしね。

夏子 難しいね。みんなの代表で答辞読むのって。

礼 とりあえずこれ、どうしたらいい？

(みんな礼のもとへ集まってきて答辞を覗き込む)

ヒロミ どれどれ．．．(と答辞を手にとつて) あっ、ここ。

「クライマックスは何と言いましてもフェリーからの夕日ではなかったでしょうか。」クライマックスなんて言葉、答辞に使っていいの？ それから．．．ここ。

「その空間、その刹那のみがあらゆる雑事から独立した幻想的な世界を作り出しているようでした。」これはちよつとオーバーよ。これじゃまるでポエムね。ねえ、こここの所、どうにかならない？

美歩 (一人浸りきっている) その幻想的な世界に引き込まれて私達は蜃気楼の国へ飛んでいってしまった。とかさ．．．。

夏子 ダメ、ダメ、そんなの。

礼 ねえ、じゃあ、こういうのは。

「その美しい景色を見つめる一人一人の心の中には何かそれまでの自分とは違ったものがありました。」

ヒロミ うん。それなら前より、一人一人の気持ちを思いやってる。

さゆり でもちよつとここ、ひどいんじゃないの？

(みんな集まってくる)

「少しでもいいものをと、連日準備に精を出した文化祭。」これだけ？ 文化祭ってさ、学校行事の中でもメインでしょ。ちよつとこれはひどいんじゃないですか。

(夏子と美歩をはじめ皆あきれた表情)

ヒロミ また始まった。あんたいくら文化祭実行委員長だからって、そこまでの権限はないんじゃない。

さゆり でも私達だって必死だったんだよ。先輩から受け継いで一年間。本当に夏休みも無かったんだから。ねえ、もっと増やしてよ。ほら、これ見て。体育祭なんて、

「若さの祭典」なんてかつこいいフレーズついてるじゃん。ねえ、礼—。

夏子 わがまま！

ヒロミ 自己中！

久美 当日、彼氏連れてうれしそうに歩いてたの誰よ。

一同 (さゆり以外) そうだよ！

文化祭へ転換

V 文化祭の場

後ろでは、文化祭のにぎやかな音楽にのって、準備が練り広げられる。その中でさゆりが壇上で文化祭開会の辞を述べている。

さゆり 以上、十五名の文化祭実行委員のスタッフをご紹介しました。最後に私ですが、私が文化祭実行委員長のさゆりです。みなさん、今日はお忙しい中お越し下さり、ありがとうございます。今日はゆっくりとこの文化祭を楽しんでみてください。

(彼氏役の花形君が登場。夏子が気づく。美歩と二人で意識しながら)

夏子 かつこいいー！

美歩

夏子 ねえ、なんだかあの人すんごくかつこよくない！？

美歩 も、もしさ、誰も声かけてこなかったらさ、私たちがかけちゃわない？

夏子・美歩 デヘデヘ・・・

さゆり ごめんね、待ったー？

夏子 さゆりだっ。

美歩 ちょ、ちよつとみんな？

ヒロミ さゆりだ。

愛 お、男の人と一緒にだ。

夏子 ちょっと声かけるわよ。さゆりちゃん！

さゆり えっ？

一同 さゆりーっ。

さゆり あー、みんな。

夏子 あのー、どなた？

さゆり お友達の花形君っていうの。

夏子 かつこいい。な、夏子でえす。

美歩 バカッ。よしなさいよ。美歩です。よろし・・・

夏子 やめなさいよ(阻止する)あの、さゆり。みんながちよっと話したいって言うんだけど・・・

さゆり え？でも・・・。

(さゆりを皆のところへ連れて行き、みんなで一斉に責め立てる)

さゆり みんなでいっぺんに言われてもわからないでしょ。

礼 友達ってほんと？

さゆり うん。ほんと。

ヒロミ いくつ？

さゆり 同じ年。

夏子 どの学校？

さゆり 青雲高校。

美歩 友達なんてうそでしょ。

さゆり ホントだってば。

愛 ね、クラブ、何やってんの？

さゆり 野球部！

一同 わー、かっこいいー。

(しかし、憤慨して口々にさゆりに詰め寄る)

美歩 それよりさゆり、文化祭実行委員長じゃないの。

夏子 あっ、そうだ。仕事は？

さゆり えっ？ あっ、いいの。じゃあね。ねえ、あっちにお化け屋敷があるんだって。行かない？

(さゆり、花形君退場)

(二人の姿を見送って)

さゆり (裏から) きゃー、こわーい。

一同 いやらしいわー。

夏子 あれが文化祭実行委員長のとる態度！？

ヒロミ もう許せない！

礼 いいんじゃないの。三年生なんだし。

愛 そうだよ。

美歩・ヒロミ・夏子(礼たちの言っていることにギャーギャーと反論)

美歩 あっ！今何時頃？

愛 十二時十分前。

美歩 あっ。もういなくなっちゃ。

夏子 そうだ。友達のライブがあるんだ。行かなくなっちゃ。

一同 じゃあね、バイバーイ。

(一同退場)

音楽や呼び込みの聲が高まり、文化祭のにぎわいを見せる。最高潮に達したところで一気に体育祭の場面へ移っていく。

ファイト、オーというかけ声と共に、まさに、若さの爆発である。

体育祭へ転換

VI 体育祭の場面

(プラカードを持った生徒に続いて七人登場)

美歩 全体とまれ、いっちなにつ。ラジオ体操第二、よおーい。

(速いスピードで)

徒競走の姿が浮かび上がる。それぞれの必死な顔。その中でその徒競走に参加できないでいる二人がいる。愛と久美である。愛はお腹が痛いかの如く座っている。

愛 お腹が痛いんです。

久美 あれ?どうしたの。愛じゃない。

愛 なんだ。久美か。驚かさないでよ。どうしたの。

久美 次徒競争だからさぼり。こんな高三にもなって走ってらんないよ。よくみんな恥ずかしくもなく走れるよ。愛 同じだ。よかった。あたしも本当に走るの嫌いな。

久美 愛ってさ、他大受験なんでしょ。じゃあ走った方がいいんじゃないの?

愛 どうして?

久美 他大受験の子ってみんな走るの好きなんでしょ。人と競争するの。抜いたり抜かれたりっていうのさ。愛 そんなことない。怖いんだもん。みんなの顔。あれが嫌なの。

久美 私もさ、走るの嫌いなんだ。なんだかばかしくってさ。中学生はいいよ、可愛くて。高校生が真剣に走っていると怖くって。

愛 私と同じだね。

久美 本当だね。

(二人笑う)

突然、太鼓の響きわたる音。応援団の入場である。背後には青組の守り神、龍のアーチが見守っている。

団員 飛龍到来。青組参上。疾風迅雷。青組必勝。本日、青組応援団長を務めますのは尾崎夏子。花の入場でございます。

(太鼓が鳴り、夏子が登場する)

応援席 夏子ー！！

夏子 学生、注目！

団員 なんだ！

夏子 私は伝統古き青組の応援団長である！

団員 そうだ！

夏子 信号の進めの色は何色だ！

団員 青だ！

夏子 爽やかに晴れた空の色は何色だ！

団員 青だ！

さゆり（応援席。急に立ち上がって）やだー！こんな所で勉強しないでよー。

一同

（愛以外）愛ー。

（愛が応援席で教科書を開いている。応援席の生徒達、さゆりに同調して詰問する。愛は教科書をしまおうといたたまれなくなって走り去る）

夏子 今年の優勝は何色だー！

団員 青だー！！

（これ以上の声は出ないという程、振り絞る声、緊張した空気がみなぎる。）

夏子 フレー・フレー・あ・お・ぐ・みー！

団員 そゃーっ。

夏子・団員 はいっ！フレッ・フレッ・あ・お・ぐ・み・フレッ・フレッ・あ・お・ぐ・みー！

（激しい応援の後、青組の生徒達が必死に目の前の競技を応援している。できるだけゆっくりとしたスピードで必死に応援する姿を鮮明に表現したい。）

美歩 私たちの学校の体育祭は、日本一の体育祭です。競技の際のみんなの必死な顔。その一瞬一瞬の輝いた表情を私は一生忘れることはできません。今日という一日で体育祭自体は終わります。しかし、私たちの新たな第一歩はこの瞬間に始まったのです。私達はもう何一つ思い残すことはありません。私達は、この瞬間に燃え尽き

ま
し
た
。

VII 愛と夏子の場面

電話のベル音と共に場面は体育祭後の、期末考査を明日に控える真夜中の愛の部屋と夏子の部屋に移る。

(電話の音) 愛もしもし。

夏子(眠たそうに)もしもし。

愛 夏子？

夏子 うん。だあれ？

愛 あたし。

夏子 愛？(驚いて目をしばしばさせる)

愛 うん。

夏子 どうしたのよ。こんなに遅く。

愛 ごめんね。

夏子 ううん。でもさあ明日の数学のことだったらダメだよ。あたし、何もわかってないんだからさあ。礼に聞いたほうがいいんじゃないの、親友なんだしさあ。

愛 うん。今、電話したんだけど寝てるみたいなの。

夏子 ふーん。出ないんだ。

愛 うん。何か誰かと話したくなっちゃって。ごめんね。本当に。

夏子 ううん。明日で終わりなんだし、頑張ろうよね。

愛 うん。どうしてこんなこと覚えなくちゃいけないんだろうね。微分とか積分とか。

夏子 うん。面倒くさいね。

愛 何かわかんなくなってきた。

夏子 何が？

愛 何もかも。

夏子 何言ってるのよ。愛は受験でしょ。頑張らなくっちゃ。それに明日、試験が終われば楽しい冬休みが来るんだって。

愛 うん。ごめんね。遅くなっちゃって。

夏子 うん。

愛のおかげで私も目が覚めた。あと朝まで頑張るから。じゃあね、バイバイ。

愛 バイバイ。

(思い詰めた表情で電話を置く愛。ラジオのスイッチを入れると、男性の声のDJが流れてくる。)

DJ みんな元気してる？試験の季節にも関わらず、おハガキを沢山ありがとう。とにかく、俺の経験から言っても苦しい時を過ぎれば必ず楽しい時がやってくるんだから。試験なんて長い人生から見ればほんの1コマの思い出。頑張れよ。俺、思うんだけど、人間てのは止まっちゃいけないんだよな。うん、走り続けなきゃいけないんだ。孤独なランナー。みんな傷だらけなんだ。苦しくても悲しくてもさ。それじゃあ、そんな傷ついたみんなへ、勇気の出る歌。中村あゆみ「翼の折れたエンジェル」

（歌が流れ出す。数学の方程式を覚えようとするが、頭に入らない愛。だんだん正気を失い教科書を破りだす愛。その激しさは十七歳の女の子とは思えないものがあり、まるで抑圧された何かが、一気に爆発したような激しさである。悲鳴。大きく衝撃音。暗転。明かりがつかと愛のいない机。暗転。）

VIII 卒業式の朝の場面

(教室で生徒たちが答辞の話の続きをしている。)

一同 そうだったよねー。

美歩 もう試験受けなくていいんだよね。バンザーイ!

ヒロミ 礼って、そういえば愛のことがあってから進路変えたんだよね。びっくりしたなあ。いきなりなんでも。でも、さすがだよ。大学では心理学勉強するんでしょ。頑張ってるね。

礼 うん。ヒロミこそよかったじゃない。熱血先生、絶対目指してね。

ヒロミ うん!

夏子 いいなー。あたしなんかやっぱり先生の言った通りになっちゃった。家政科だよ。ホントに裁縫苦手なのに。実をいうとき、あたしギリギリだったんだ。四年制の国文科。大丈夫かなーっなんて思ってたら、定員オーバーで足切りだったみたい・・・でもいいんだ。真面目に大学通って、それで少し楽しんで、エプロンの似合うお嫁さんになっちゃうんだー。

ヒロミ 夏子はいいいお嫁さんになるよ。

さゆり なにヒロミは年寄り臭いこと言ってるのよ。あたしはそう簡単にはお嫁にはいきませんからね。第一志望四年制英文科、バッチリ!!アップル、グーグル、フェイスブック、ゾゾタウン、どこでも受けちゃうから。三年間OLやってー、それから、月にでも行こうかな・・・。

美歩 OLかあ。さゆりがOLになる頃には、あたしがしっかりしたスタジオつくって待ってるから、生徒動員よろしくね。なんてたって今やエアロビクスはOLの花嫁修業の一つですからね。美しさは、健康な体が基本である。ミテクダサイー!今週のワンポイント。(踊る)

夏子 なんかいマイチ・・・なんてことないよ。でもいいなー。

美歩 そんなことないよ。まだ見習い中だもん。

さゆり あ、ねえ、久美はどうしたの？とうとう先生の力借りないで、自分で決めちゃったの？

久美 うん。

(いつの間にか花瓶にあの花束が活けられている。)

さゆり ねえ、そのバラ、もしかして久美が持ってきてたの？

一同 (口々に) きれい・・・。

夏子 卒業式にバラなんてかっこいいー。

久美 愛ってさ、バラの花好きだったじゃない。毎朝早く来て、教卓の上の花瓶の水、取り替えてたじゃない。

一同 (沈黙)

礼 うん・・・そうだった。

美歩 ねえ、愛の卒業証書ってさ、作ってもらえるのかな。

夏子 作ってもらえるといいけどね。

美歩 もしだめだったら、私達が絶対に作ってあげようね。

一同 うん。

礼 私、今でもあの時起きて愛と電話で話してたらよかったって思うことあるよ。

(突然の礼の様子に言葉のないみんな)

久美 何か言っただけよかったのかもね、礼に。

さゆり 愛はさ、弱かったんだよ、人間的に。

ヒロミ でもあの日の朝、嬉しそうに玄関掃除してたって近所の人たち言ってたよね。

美歩 なんてあんな高いところ登ろうなんて思ったんだろ。

ヒロミ きっとまた、朝の冷たい空気を肌で感じたいとか思ったんじゃない。

夏子 ロマンチストだからね。愛は。愛らしいよ。

ヒロミ 事故だったかもしれないじゃない。

さゆり うん。

礼 あのギリシャ神話の自分の姿にみとれて池に落ちたナルシスみたいに・・・

(それぞれに花を見る。)

夏子 ほんと。そうだったかもしれない。

久美 そう思いたいね。だけど愛って、体育祭でも何でも、一番走るの嫌がってたじゃない。だからもう、走るの嫌になっちゃったのかと思った。だって、あたしも心からそう思ったことがあったから。でも、今考えてみると、そうじゃなかったのかもしれない。

夏子 そう言えばさ、試験最終日の朝、ほんと空が澄んでたんだよね。あたし今でも覚えてるけど、学校までのあの並木道から空を見上げた時、ああ、冬がくるんだなあって思ったこと、はっきり覚えてる。
ヒロミ もう、春なんだね。

(沈黙の中に視線をバラへ投ずる。)

久美 わたし、どうしても行きたかったの、イギリス。

一同 イギリス？

夏子 英語の勉強でもしにいくの？

久美 バラの花の育て方を勉強しにいくの。

一同 バラ？

久美 ストラットフォードエイボンの五番街にバラの花屋があって、そこで昼間は英語の専門学校に通いながら、三年間、修行させてもらうことになってるの。

一同 すごーい。

(久美のもとへ集まる)

礼 よかったね。久美。愛が喜ぶね。

(間)

夏子 そっか・・・みんなそれぞれの道、決まったんだね。

(突然、後輩たちが照れくさそうに、それでいて非常に嬉しそうに登場する。)

ファン（照れながら喜んでゐる夏子）ここは応援団の後輩と夏子の心温まる場面としたい。ファンは多ければ多いほど迫力がある。

増田 あのー、すいません。

さゆり はい。

澤渡 あのお……。

中曽根 早く言いなさいよ。あの尾崎先輩、いらっしやいますか？

夏子 あたし？

三人 きゃーっ！！

増田 御卒業、おめでとうございます。

澤渡 応援団の時は、大変お世話になりました。

夏子 やだー、いまさら、そんなあ……。

中曽根 御卒業なさってからも、がんばってください。

夏子 うん。

増田（真剣な表情で）お手紙、書いてもいいですか？

夏子 いい……わよ。

三人 きゃーっ

一人照れている夏子。

中曾根 あの、これ、三人からです。(プレゼントを差し出す。)

夏子 えー、あたしに？ なんだろー？

一同 開けてみなよ。

包みを開けるとエプロンである。

夏子 ありがとう。大切にするね。

澤渡 あ、それじゃあ、これで……。

三人 失礼します。

一同 バイバイ。

照れながら喜んでいる夏子。

さゆり あのー……

夏子 (キリリと) いいわよ、なんちゃってね。

ヒロミ 意外と人気なんだね。

夏子 そんなことないよ。団員の子達が忘れずに来てくれたんだあー。

さゆり 義理だよ、義理。

ヒロミ 面倒見がいいからね、夏子は。慕われるんだ。

夏子 そんなぁー。

礼 ねえ・・・どうしよう、この続き。

夏子 あっ・・・もう時間なくなっちゃったね。

ヒロミ (礼の答辞を見直して) やっぱり難しいね。みんなの代表で答辞読むのって。

夏子 大切なのはさ、今日、あたしたちが卒業するってことなんだよね。

ヒロミ そうなんだよね。

初めは一人ずつ、最後はみんな同時にうなづく。

さゆり 礼、今の一つ一つの思い出を思い出しながら大切に読んでよね、この答辞。

礼 うん。

美歩 頑張ってるね。そしたらきつとうまくいくよ。あたし礼が答辞って言っただけで、なんかこう、涙がでてきちゃう。

夏子 頑張ってるね。

ヒロミ あたしたちの代表なんだから。

さゆり 失敗しないでよ。

夏子 それじゃあ、礼の答辞成功を祈ってエイエイオー！

さゆり・ヒロミ・美歩 エイエイオー！

礼 ありがとう。

久美 みんな、苦しい時でも悲しい時でも、わたしたちは走り続けようね。

（おもむろに、手に持ったバラ一輪を礼に差し出す。）

夏子 やだ久美、臭いんだもん。

ヒロミ でも、そこが久美のいい所なのかもね。

礼 あのね、答辞っていう限られた中では言い尽くせない思い出が一人一人の中にはやっぱり、あるんだよね。

夏子 ——さっ、行こっか。

（静かな音楽が流れ始める）

一同 うん。

（一同歩き始める。それぞれ思い思いのポーズをとり、自分の進む方向へ向かい、一斉に走り出す。礼だけいったん足をとめる。）

礼 もう一度、この制服を着て、あの駅で待ち合わせをしたい。もう一度、みんなと同じスタートラインに立って走ってみたい。でも、私達の目の前には、これからはもう、同じゴールは見えないんです。会えなくなるのが卒業なんじゃない。どこまでも、見えないゴールに向かって一人一人が走り続けること。それが私達のGRADUATION。

（もう一度走り出す礼。走るのをやめて）

IX 卒業式の間

先生（声のみ）生徒総代、答辞、鮎川礼。

礼 はい。（しっかりと）

（音楽が高まり静かに幕が降りる。）

—幕—